

『革命のヨーロッパ』

(The European Revolutions and the Character of Nations, 1931)

Eugen Rosenstock-Huessy

宮島直機 訳

序文 (ハロルド・バーマン)

この本が最初に出版されたのは 60 年も前のことだが（初版は 1938 年。バーマンの序文は 1998 年に再版されたとき掲載）、いまだにその内容は古さを感じさせず、読者を魅了して止まない。しかし、この本は内容に相応しい評価がされてきたとは、とても言えない。伝統的な歴史学とその内容があまりに違っていたため、伝統に拘る歴史学者に無視されて来たからである。「さまざまな革命を分析してみせた」と称する歴史家に至っては（“The Anatomy of Revolutions”を書いた Crane Brinton のことか？：訳者）、この本を扱き下ろす書評を 4 つも書いている。このことで思い出すのは、18 世紀のイタリアの歴史学者ヴィーコ Gambattisa Vico である。ヴィーコは生きていたとき完全に無視され、死んでからも長い間、評価されなかった。しかし、いまではアメリカ中の大学で偉大な先駆者として評価されている。ヴィーコの著作を読むために特別の授業が用意されるまでになっているが、ローゼンシュトック=ヒュシーも遠くない将来、新しい歴史学の提唱者として高く評価されることに成るであろう。

この本を読めば、「歴史学 history」がどうあるべきかがよく判る。高度に専門的なことが素人にも判るように、やさしく解説されている。歴史家として特別な訓練を受けていなくても、我々がどこから来て、どこに向かっているかが理解できるように説明されている。また歴史家にとっても、この本は役立つ内容に成っている。歴史とは何か・歴史はどう書かれるべきかが、判りやすく説明されているからである。この序文では、まずローゼンシュトック=ヒュシーの「歴史観 theory of history」を紹介してみたい。ついで、それがこの本でどう具体化されているか紹介してみたい。

I

ローゼンシュトック=ヒュシーによれば、ヨーロッパ史は大きな転換期を迎える時になると、おなじ「課題 motif」が繰り返し登場して来るといふ。またヨーロッパ史は、この繰り返し登場して来る「課題」を念頭に時代区分をする必要があるといふ。そこで歴史家は、まず繰り返し登場してくる「課題」を見抜く必要がある。ローゼンシュトック=ヒュシー自身は、ヨーロッパ史が新しい時代の「生みの苦しみ birth throes」ともいふべき「出来事 great

upheavals」によって区分されると考えている。「出来事」とは、記念日となって残っている出来事であり、新しい政治制度・宗教・思想を生み出すことになった出来事のことである。また「時代を画する make epochs in history」ような出来事は、民衆が「その情熱 collective passions」を爆発させるときに発生している。

したがって歴史家たる者、事件が起きた日時を確認するだけでは不十分であり、歴史を長期的な視野で捉えらるべきである。「細部に拘り、無意味な事実を収集するだけに終わることを避けるため、また事実根拠づけられない歴史法則を主張することを避けるため to avoid the Scylla of disordered detail and the Charybdis of meaningless generalities」、歴史家は世代や世紀を単位に考えるべきなのである。「科学的」とか「客観的」と称してきた 19-20 世紀の歴史学は、ただ細かな史実に拘って来ただけであった。歴史の大きな流れを見ようとして来なかった。

ローゼンシュトック=ヒュシーにとって、歴史とは彼自身が経験した歴史、彼と同世代の人間が経験した歴史、ヨーロッパの自殺行為ともいうべき 1914 年の戦争を引き起こすことになった歴史を意味していた。ドイツ軍の兵士として彼がベルダン Verdun の戦線で経験したこと、また彼と同世代のヨーロッパ人が第一次世界大戦で経験したことが原因で、「新しい歴史観 a new basis for understanding history」が登場して来ることになった。その結果、新しいヨーロッパ観、延いては新しい世界観を「自分自身のもの our own autobiography」とすることができたのである。ローゼンシュトック=ヒュシーは、これまで各国別でしか考えられて来なかった革命が、じつは全ヨーロッパ的な革命であったことを明らかにしているが、同時に 19-20 世紀の「史実崇拜の realist」歴史学が、無意識のうちに自国中心の歴史を前提にしていたことを明らかにして見せた。

ローゼンシュトック=ヒュシーの「歴史観」を知れば、社会科学や人文科学にデカルト René Descartes 的な自然科学の手法を持ち込むことが間違っていることも理解できる。人々を理想実現に向けて一致団結させる「言葉の力 power of language, or speech」を信じていたローゼンシュトック=ヒュシーは、客観的であることの如何わしさを主張して止まなかった。いままでは多くの優れた研究者が、彼のこの考え方に賛同するように成っている。しかし、それでも社会科学や人文科学（「歴史学、もしくは歴史の人間的な側面の研究 “science of history or “humanity” of history」もそこに含まれている）は、相変わらずデカルト的である。ただ、デカルト的な方法が間違っているとするローゼンシュトック=ヒュシーの主張に耳を傾ける者も増えてきている。歴史のあり方を決めるのはデカルトが重視した数字などではなく、人間の「情熱」や伝統なのだということが認識されるようになって来ている。ところが凡庸な歴史の書き手（博士論文・教科書・専門論文などの書き手）は、相変わらず数字の収集と分析しか頭になく、歴史を伝統的なやり方で説明するだけである。

ローゼンシュトック=ヒュシーは「彼独自のやり方 personal style」で歴史を叙述しているが（これを優れた歴史家であるページ・スミス Page Smith は、「きわめて反アカデミックな手法 fiercely anti-academic language」と呼んでいる）、彼がそんな方法に拘るのは、「そ

れ以外の方法では自分の歴史観を説明できないから **essential to the statement of his vision**」(ページ・スミスの言葉)なのである。

人類には実現すべき目標があり、それが何かということは歴史を見れば判るとするのがローゼンシュトック=ヒュシーの「歴史観」である。歴史の大きな流れを読み取ってくれば、我々が将来どうなるかも知ることができると彼は言う。目指すべき目標を何とか実現するために、おなじ「課題」が繰り返し登場して来ると言うのである。ただし、歴史家は自分の結論を読者に押し付けるようなことはすべきでない。なぜなら、歴史学は物理学や化学ではないからである(真実は一つではない)。ローゼンシュトック=ヒュシーは、読者に自分の結論を押し付けるようなことはしていない。ヨーロッパの歴史や伝統を読者自身に考えさせ、読者自身が答えを見つけて来ることを期待している。この本の最後の文章が、そうした彼の「歴史観 historiography」をよく物語っている。「ベスビオ火山の灰のうえに再建された街で飲むワインの味は、また格別なはずである。私がこの本を書いたのは、生き残りを望む者が自分だけで無いはずだと確信していたからであった」(本文? ページ参照)。

II

ヨーロッパの近代史は 900 年前^{まぎ}ローマ教皇の指導下に、カトリック教会が皇帝・国王・領主による教会支配を排除した「教皇革命 **Papal Revolution**」に始まるというのがローゼンシュトック=ヒュシーの考え方である。この革命を契機に、ヨーロッパでは繰り返し革命が起こることになった。イタリアでも(都市国家の登場)、ドイツでも(宗教改革)、イギリスでも(名誉革命)、フランスでも、アメリカでも(独立戦争)、ロシアでも革命が起きた。どの革命も一見すると国別に起きているように見えるが、じつは全ヨーロッパ的な規模の革命であった。また 1914 年に第一次世界大戦が勃発し、さらに 1917 年にロシア革命が起きたことから判るように、どの革命も目標の実現に失敗していた。

ローゼンシュトック=ヒュシーによれば、ヨーロッパ人の夢は国境を超えてヨーロッパを 1 つに統合し、さらに全人類を視野に入れつつヨーロッパの再生を実現することであった。第一次世界大戦から 2 世代を経たいま、やっとその夢が現実のものになろうとしている。

この本では、まずロシア革命が紹介され、そのあとで 18 世紀・17 世紀・16 世紀の革命へと話が進められていく。歴史を逆に辿っていくのである。ヨーロッパを 1 つに統合する切っ掛けになった 1075-1122 年の「教皇革命」は、最後の最後になってやっが登場して来る。おかげで読者は馴染み深い出来事から読み始めることができるが、ヨーロッパが 1 つになる話の開始まで(これこそが著者のテーマであった)何百ページも読み進めなければならないことになる。

マルクス **Karl Marx** に言わせれば、「歴史を牽引^{けんいん}して来たのは革命であった」。しかし革命が歴史を牽引^{けんいん}してきたのは、ヨーロッパだけであった。ドイツ・イギリス・フランスで起きた革命をマルクスは「ブルジョア革命」とか「資本主義革命」と呼び、そのあとに「プロレタリア革命」ないしは「社会主義革命」が続くと彼は考えていた。彼が「革命」と認めるの

はこの2つだけで、16世紀以前に起きた革命が「封建制度」の実現を目指す「革命」であったと彼は考えていない。このマルクスの時代区分法、つまり中世の封建制度が革命によって近代の資本主義制度に変わり、さらに社会主義制度に変わるという時代区分法は、不幸なことに社会主義制度を採用したロシアだけでなく、ロシア以外の国でも採用されて来た。この時代区分法で最大の問題点は、11世紀末-12世紀初めに起きた革命が無視されていることである。この革命は、それを起こしたローマ教皇グレゴリウス7世に^{ちな}因んで「グレゴリウス改革」と呼ばれているが、最近この出来事が「中世前期 low Middle Ages」と「中世盛期 high Middle Ages」を^{へだ}隔てる革命的な出来事であったと考えられるようになって来た。これを「教皇革命」と呼んだのは、ローゼンシュトック=ヒュシーが最初であった（この本の構想が最初に登場して来るドイツ語版 **Die Europäischen Revolutionen: Volkscharaktere und Staatenbildung, 1931** を参照）。カトリック教会の変革が革命的な意味を持っていたことを彼は見抜き、またそれがのちの世俗世界の革命（カトリック教会の変革に対抗して起きた革命であった）に大きな影響を与えたことを彼は初めて指摘して見せたのである。その結果、マルクスの経済決定論が間違っていることが証明されることになった。いずれの革命も経済のあり方のみならず、政治・社会・法制・宗教など、あらゆるものを変えてしまったのである。また、それは1国で始まりながら全ヨーロッパに広がっていったのである。

この本の第8章「ポリュビオスの政体循環論」でローゼンシュトック=ヒュシーは、ヨーロッパ各国の革命の共通点、およびヨーロッパ各国がどのようにして共通のヨーロッパ文化を創ることになったかを説明している。ポリュビオスの政体循環論によれば、王制が腐敗すると専制になり、つぎに専制が貴族制に取って代わられる。さらに貴族制が腐敗すると寡頭制に取って代われ、寡頭制はやがて民主制に取って代わられるが、民主制も腐敗して衆愚制になり、ふたたび王制が登場して来ることになる。しかしローゼンシュトック=ヒュシーによれば、ヨーロッパで政体は循環していなかったのである。ヨーロッパでは、王制・貴族制・民主制が共存していた。おなじように、封建制・資本主義体制・社会主義体制も共存していた。第12章で彼は再度、ポリュビオスに^{げんきゅう}言及しているが、そこで彼はヨーロッパ各国の革命に見られる共通点を挙げている（最初からヨーロッパ全体が問題になっていた「教皇革命」にも、おなじ共通点が見られる）。どの革命も数世代、続いたあとで終わりを迎え、革命が終わると今度は革命に対する反動期があって、そのあとで革命は「終焉^{しゅうえん} Golden Age」を迎えていた。この革命の周期についてローゼンシュトック=ヒュシーは、政治・経済・法制面のみならず、言葉や芸術なども取り上げて論じている。

もちろん、この本にも多くの問題があるが、みごとな^{どうきつ}洞察に^み満ち溢れていることは否定できない。たとえばアメリカ革命（独立戦争）に関する著者の指摘は、たいへん興味深い。1776年のアメリカ革命は、17世紀のイギリス革命（ピューリタン革命）が持っていた貴族的・「共同体的 **communitarian**」・伝統主義的な特徴と、フランス革命が持っていた民主的・個人主義的・合理主義的な特徴を共に有していたと言うのである（この特徴は現在のアメリカについても指摘できる）。

どの革命も、まず過激な運動として始まり、結局は決別するはずだった過去との妥協で終わっている。1938年にこの本を初めて出版したとき、すでにローゼンシュトック=ヒュシーはロシア革命が1934年に「終焉」を迎え始めたと書いていた。スターリン **Iosif Stalin** はロシア史とロシア語の大切さを強調するようになり、それまでの過激な国際主義を放棄し始めたのである。ロシア革命は、「終焉」を迎えるのに50余年、掛かったことになる。

『革命のヨーロッパ』が出版されてから60年が過ぎたが、いまだにローゼンシュトック=ヒュシーが提唱した「新しい歴史学のあり方 **new science of history**」は歴史家に影響を与えていない。それどころか歴史家の視野はますます狭いものになり、歴史学が目指すべきものからますます遠ざかっている。現在と未来にとって過去が何を意味するか理解するようになった歴史家は、ほんの2、3人に過ぎない（それも、やっと晩年になってからである）。歴史家が問題にするのは細かな事実に過ぎず、未来にとって重要な意味を持つ出来事や、かつて父祖たちの「情熱」を掻き立てた言葉などは無視されたままである。問題にされているのは、相変わらず「諸勢力 **forces**」や「諸条件 **conditions**」だけである。

ローゼンシュトック=ヒュシーは偉大な予言者であった。そして偉大な予言者の例にもれず、彼も生きているあいだは無視され、死後やっと注目されるようになった。独特なスタイルで書かれたこの本は、歴史とはどう考えられるべきものなのか、どうすれば21世紀の歴史学が人類の未来を予測できるのか示してくれている。